

乳児－保育者間の愛着関係の変容過程

－質的データによる検討－

○上田 七生

山崎 晃

(広島大学大学院 教育学研究科)

昨年度および一昨年度は、第一愛着対象者との愛着関係が不安定な対象児（女児、2歳5ヶ月；男児、1歳3ヶ月）について、対象児が保育者との間に愛着関係を形成させていく過程、およびその愛着関係の変容過程、第一愛着対象者との関係の変容過程について検討した。その結果、どちらの対象児も、徐々に特定の保育者との間に愛着関係を形成させていくことが明らかとなった。また、友達に対する優しさが芽生えたり、第一愛着対象者との関係改善の可能性も示された。

これらの結果は、対象児の保育者に対する愛着行動の量の増減に関する検討から得られたものであった。そこで、本研究では、これまでの量的なデータの中ではみることのできなかったやり取りについて、質的なデータを抽出することにより、量的データと質的データを対応づけて検討する。

方法

対象者：(1) 第一愛着対象者との愛着関係が不安定なしげと(2歳10ヶ月)。(2) 3歳未満児クラス担当の保育者。主任はとうま先生ともとき先生。

観察期間・観察時間：観察期間は、2002年7月～2003年3月。観察時間は、午前9時半～10時半。

観察内容：1週間に1度、乳児室において対象児の行動を観察した。1～2ヶ月に1度訪問する見知らぬ人に対する対象児の行動、また、週に1度だけ顔を合わせる観察者に対する対象児の行動も観察した。

記録方法・分析方法：乳児室における対象児の行動および大人(保育者、見知らぬ人物、観察者)に対する愛着行動等をビデオカメラで録画した。(1) **量的データ：**愛着行動に関して、事前の観察結果とAQSを参考にしてチェックリストを作成し、タイムサンプリング法を用いて1分ごとにコーディングした。観察時間は1日につき約1時間であったが、日によってその時間が異なったり、対象児が撮影不可能な範囲にいることもあった。そこで、単位を統一するために、対象児ごとにコーディングされた行動について、出現率(カテゴリーごとの行動の頻度 / その日の観察時間)を求めた。出現率の9ヶ月間の推移によって愛着関係がど

のように変容したかを検討した。(2) **質的データ：**ビデオテープに記録された対象児の行動をすべて書き起こした。

結果および考察

量的データから、しげとの行動全体に占める愛着行動の割合は、7月～8月にかけてと、10月～11月にかけて多くなっていた。各保育者に対するしげとの「愛情欲求」行動の量をみると、「愛情欲求」行動の量が多かった7月～8月と10月～11月を比較して、7月～8月の時期は、「愛情欲求」行動が複数の保育者に対してほぼ同等に向けられているのに対し、10月～12月の時期は、特定の保育者に対する「愛情欲求」行動が多くなっていた。すなわち、10月～12月の時期において、しげとはとうま先生との間に愛着関係を形成していったと考えられる。なお、保育者の話によれば、しげとはとうま先生との間に愛着関係を形成させはじめると、とうま先生がいないときに強い不安を覚えるようになったため、10月以降は意識的にしげともとき先生がかかわる機会を増やしたということである。その結果、10月以降、保育所におけるしげとの主な愛着対象者はとうま先生、次いでもとき先生という構造ができたと考えられる。

そこで、7月～8月および9月の時期と、10月～12月の時期について、具体的な事例をあげて検討する。

《事例①：7月》

とうま先生が、ダンボールを切り開いたものを何枚かつなぎ合わせ、乳児室に露天風呂をつくった。しげとは、お風呂の中で大はしゃぎである。勢いよく回転したり、ピョンピョンと飛び跳ねたりしている。そのうち、お風呂から出ていき、もとき先生に「先生、ほら！」とお風呂を指差しながら言う。もとき先生は「いいねー、お風呂」と答える。またお風呂に戻ってはしゃいでいる。1先生が外から乳児室に戻ってくると、「ほらー！」と言う。1先生は「お風呂！まあ～っ」と答える。とうま先生が職員室から戻ってくると、「先生、お風呂ー」と言う。とうま先生は「よかったねー」と答

える。

《事例②：9月》

F先生が、みんなの前で絵本の読み聞かせをしている。F先生に後ろから抱きついた後、すぐに正面に回ってF先生の顔をのぞき込む。もとき先生の隣に座り、またすぐに小走りで、本が見やすい場所へ移動する。少しして立ち上がり、F先生が読んでいる本を“パンッ”とたたく。F先生が「やめてね」と言うと、F先生の後ろに置いてある本をF先生に渡す。F先生が「ありがとう」と言うと、ピョンピョンと飛び跳ねてからもとき先生に抱きつく。勢いよく抱きついたため、もとき先生は自分の頭を押さえながら「なんでたたくん？」と言う。しげとは、もとき先生から離れて「パーカ」と言って座る。しばらく座った後、小走りで移動し、とうま先生のひざに座る。I先生がお集まりの輪の中に入ってくると、I先生に抱きつく。

これらの事例から、7月～8月および9月の時期においては、しげとが愛着行動を示す対象者は定まっておらず、どの保育者にも同じようなかかわりを求めていると考えられる。

一方、10月～12月の時期においては、事例③と④が示すように、しげとは特定の保育者のそばから離れたがらず、また、保育者が他児とかかわることを嫌がる傾向がみられた。

《事例③：10月》

しげとはもとき先生のひざに座っている。もとき先生は、そばでR児がY児の頬をつねっているのを目撃する。もとき先生がR児をとめに行くために立ち上がり、しげとはもとき先生のひざからすべり落ちる。しげとはすぐにもとき先生のところへ行き、仲裁しているもとき先生の肩に手をのせる。もとき先生は、R児をY児に謝らせようと両児を対面させている。そこへしげとが出てきて、もとき先生のひざに座ろうとする。もとき先生はしげとを横にどかせ、Y児をR児の前に引っぱる。しげとはY児をたたく。Y児はしげとをたたき返そうとするが、もとき先生がY児をとめ、R児とY児の仲裁を続ける。しげとはおもしろくなさそうな表情で、もとき先生の後ろに回り肩に手をのせる。その後、前方にいるS児のところへ行き、S児が持ち上げているピストル（ブロックで作ったもの）をはたき落とす。

《事例④：11月》

しげとがとうま先生に抱きついている。とうま先生が歩き出すと、しげともついていく。途中で見知らぬ人の横を通り過ぎるが、しげとと見知らぬ人とのやり取りは特にならない。とうま先生は用事を済ませると床に座り、しげともとうま先生のひざに座る。しばらくして、とうま先生は「ちょっと待ってね」としげとをひざから降ろし、再び用事を済ませにいく。しげとは後についていき、とうま先生が作業する様子を見ている。「先生、何するん？」と嬉しそうに聞いたり、手伝ったりする。

このように、特定の保育者のそばから離れたがらないという傾向は、愛着関係が安定していく過程での重要な指標となるであろう。保育者は、「離れたくない」といった愛情欲求を示す乳幼児に対して、その欲求をできる限り受けとめ、しっかりとかわる必要がある。しげとはとうま先生、あるいはもとき先生との間において、しっかりとしたやり取りを経験したことによって、両者との愛着関係が安定していったのであろう。

しげとは、12月までの間にとうま先生、あるいはもとき先生を安全基地とすることができたため、1月以降は、行動全体に占める愛着行動の割合が減少した。保育者のそばから離れることができるようになり、友だちとかかわりが増えはじめた。具体的にはどのような行動の変化があったのか、以下に事例をあげる。

《事例⑤：2月》

しげとがおもちゃを押しながらいとうま先生のところに行くと、とうま先生はピストル（ブロックで作ったもの）を持っている。しげとが「何？これ？」と聞くと、とうま先生はピストルを渡して「Jちゃんのもの。貸して」って（言っておいで）」と言う。しげとはピストルを持ってJ児のところへ行きながら、「Jちゃん、貸してー」、「Jちゃん、しげとちゃんにもこれ作って」と言う。J児は「ダメ」と言ってしげとの持っているピストルをとり返す。しげとは一瞬とうま先生の顔を見るが、すぐにJ児の隣に座り、J児の様子をうかがっている。

以前は、友だちの持っているものを無理矢理に奪ったりすることの多かったしげとであるが、とうま先生やもとき先生を安全基地とすることができるようになってからは、徐々に、「貸して」と言ったり、我慢することができるようになりはじめた。その傾向が、事例⑤にも表れているといえよう。